20081118文科省

特別支援教育協力者会議レジメ

（学）あけぼの幼稚園
園長　安家周一

１／現場の状況

1-しょうがい児は増えているのか
　しょうがいの定義がより細かく専門的になってきた
　重度の子どもが入園してくることが少なくなったような気がするが

2-現場は混乱している

3-保護者は不安を抱えたまま子どもと向き合い、長い時間過ごしている＝現実に自分の子どもの特別支援状態を受け入れることは難しい

２／幼児教育は元々全ての子どもに配慮した教育である

1-小学校以降の教育との違いは、「相対や絶対評価」ではなく「個人内評価」であること→個々の指導計画

2-それにしては、１学級あたりの園児数が多い

3-保護者が期待する評価観が相対評価

３／特別支援教育の対象児も大切にしたい

1-特別支援対象児がいる学級では、一般児にとっての特別支援児の存在自体が大きな学びの存在である。逆に、一般学級における特別支援児にとって、普通の学級にいることが意味ある環境となりうるか

2-人数的な困難性→個別支援計画の立案と実行

3-財政的な困難性

4-専門性の限界＝特別支援の専門的知識が乏しいまま、必死に頑張っている

4-幼稚園の現場に、教諭以外の専門性（臨床心理的視点や医学看護的視点、ソーシャルワーク的視点）を迎え入れることが、財政面や省庁の縦割りもあって様々な無理がある

４／小学校との接続

1-小学校入学年齢になると、何が何でも入学させることが子どもにとって幸せか

2-将来の共存を願った個別支援教育

3-教諭同士のそれぞれの学校理解

4-教育課程や具体的指導計画の連続性